

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K14482

研究課題名（和文）感情認知における自己主体感覚情報の利用可能性

研究課題名（英文）Availability of sense of agency in emotion recognition

研究代表者

佐々木 恭志郎（Sasaki, Kyoshiro）

関西大学・総合情報学部・准教授

研究者番号：70831600

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、感情の形成において自己の身体の状態および身体運動がどのように関与するのかを総合的に理解することであった。結果として、身体の運動や状態が自身が体験する感情の快不快にバイアスをかけることが示された。また快不快だけではなく、それらを基に形成されるような感性印象の形成にも影響を与えることが明らかになった。なお、本課題期間中にコロナ禍にみまわれたが、その状況下でヒトの感情のリアルな側面についても検証することになり、基礎知見だけではなく応用的な示唆を得ることもできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

身体の状態が変わることで感情が変容する可能性が示された。このことは感情形成のメカニズムの一端を明らかにした点で学術的な意義があるといえる。また、身体を利用することで感情の可視化が可能となる展開も考えられ、捉え難く抽象的な感情を理解する一助になるのではないかと期待される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present study was to comprehensively understand how one's bodily states and movements are involved in the formation of emotions. The results showed that the movement and state of the body can bias the pleasantness or unpleasantness of the emotions that one experiences. Furthermore, it was revealed that they not only affect pleasantness and unpleasantness, but also influence the formation of affective (kansei) impressions based on them. During the project period, the world was in the grip of the COVID-19 pandemic, which led us to examine the realistic aspects of human emotions under these circumstances, enabling us to gain not only basic insights but also practical implications.

研究分野：実験心理学

キーワード：感情 身体性 行為主体感 空間感情マッピング 意識

## 1. 研究開始当初の背景

スイッチを押して電気がついたとき、「自分が電気をつけた」という感覚を抱くと思う。このような「自分の行為が外界の変化をもたらした」という感覚は「自己主体感」と言われている (e.g., Haggard & Chambon, 2012)。自己主体感はさまざまな要因の影響を受け、とりわけ行為と行為結果の間に遅延がある場合 (e.g., Ebert & Wegner, 2010) や行為結果が予期せぬものである場合に自己主体感は弱くなる (e.g., Sato & Yasuda, 2005)。感情もまた自己主体感に影響を与える。例えば、我々は良い出来事は自己に帰属する一方で、嫌な出来事は自己には帰属しない (e.g., Bradley, 1978)。また、行為結果が不快な音声刺激のだと自己主体感が低下する (Yoshie & Haggard, 2013)。これらの結果は、快な出来事は自己と結びつけ、不快な出来事は自己に結び付けないことを示唆している。それでは逆に、自己の行為が原因と認識されたイベントは、そうではない場合に比べて快に感じるのだろうか。これまでの感情認知研究では、どのような要因が関与しているのかについて検討されてきた。例えば、空間周波数 (e.g., Wilkins, 1986; Sasaki et al., 2017a)、視覚的注意 (e.g., Raymond et al., 2003)、身体運動の方向 (e.g., Sasaki et al., 2015)、処理の流暢さや困難さ (e.g., Reber et al., 1998; Sasaki et al., 2017b) などが感情の認知に影響する。つまり、低次から高次の階層的な情報処理が感情認知には関与する。しかしながら、感情認知に自己の主体感がどのように関与しているのかは謎に包まれている。先述の自己主体感覚と行為結果の感情価の関係を考慮すると、自己主体感の操作により「自己」と「行為結果 (イベント)」の結びつきが変われば、イベントに対して抱く感情が変調されることはごく自然に予測される。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、身体の状態および身体運動が感情の認知処理過程においてどのような役割を担っているのかを、主に自己の主体感という切り口から解明することである。本研究の知見を基に「自己の主体感」を組み込んだ感情認知メカニズムを提案し、感情認知研究に新たな展開を生み出すことを目指す。

## 3. 研究の方法

主に身体の状態や運動遂行等が認知プロセスに与える影響を実験室実験で検討した。また、発展的課題として、文化差の影響も調べており、マルチラボ研究やフィールド研究なども取り入れた。また、幼児を対象とした研究も展開する機会を得たため、発達の側面の検証を行った。そして、はからずもコロナ禍に見舞われ、その過程で現実場面での感情形成に着目した研究についても遂行した。加えて、本プロジェクトについては、計画段階から積極的にオープンプラクティスを取り入れることを宣言していた。

## 4. 研究成果

運動行為やそのシミュレーションが我々の感情・感性印象の形成に寄与することを明らかにし (Iseki et al., 2022, *PeerJ*)、さらに緻密な実験により反応バイアスの可能性を徹底的に排除した (Sasaki et al., 2023, *PsyArXiv*)。また、運動の有無だけでなく、運動の方向も感情認知に関わる可能性を見出した (Yonemitsu et al., in press, 基礎心研)。これらのことから、運動による感情形成については、運動遂行という1次的な過程と運動の内容といった2次的な過程の2段階プロセスが存在する可能性にたどり着いた。発展的な展開として、対象の身体の状態 (正立・倒立) も我々の印象形成に関与していることも明らかになった (Yoshimura et al., 2022, *F1000Res.*)。また、身体 (特に顔) の重複が印象を減価させることも発見した (Yonemitsu et al., 2022a, *PLOS ONE*; Yonemitsu et al., 2022b, *BMC Res. Notes.*)。

身体の状態や身体を取り巻く環境が感情認知に与える影響について、どの程度文化差が存在しうるのかについても貴重な示唆を得た。具体的には、表情フィードバックについては、身体の感情表現 (顔の表情やバイオロジカルモーションの感情印象) について判断を求める場合には複数の文化圏で共通した傾向が見られた (Marmolejo-Ramos et al., 2020, *Exp. Psychol.*)。また、視覚パターンがもたらす不快感については、山岳地域に住む少数民族の場合はそれほど顕著には感じないことが判明し (Zhu et al., 2020, *PeerJ*)、身体を取り巻く環境の関与が示された。この視覚パターンがもたらす不快感については、発達プロセスについても知見を得ることができ、4歳ごろからすでにこの種の不快感が生じることが示された (Suzuki et al., 2023, *Sci. Rep.*)。

また、これまでに実験室実験で明らかにされてきた感情認知の知見が現実場面でどの程度応用可能かについても検討を重ねた (e.g., Yamada et al., 2020, *F1000Res.*)。結果として、コロナ禍での行動変容に基礎研究の知見をそのまま応用することは容易ではないことが示された (Yang et al., 2020, *PeerJ*; Yang et al., 2021, *PeerJ*; Yonemitsu et al., 2020, *R. Soc. Opn. Sci.*)。

加えて、オープンプラクティス、とりわけ査読付き事前登録 (レジスタードレポート、レジレポ) を積極的に実践したが (e.g., Sasaki et al., in press, *R. Soc. Opn. Sci.*)、その中でいくつかの気づきも得た。特にサンプルサイズ設計の信頼性毀損行為については、レジレポは有効な手段の一つであると考えられる (Sasaki & Yamada, 2023, *Front. Hum. Neurosci.*)。また、倫理審査やグラント

審査とのドッキングを想定しやすいシステムとなっており、研究プロセスの効率化を進める際の軸になりうる (Mori et al., 2022, *BMC Res. Notes*). 一方で、レジレポにも課題がいくつか存在しており、とりわけコロナ禍のような予期せぬ事態に見舞われた際に、柔軟な対応ができるようにシステムを改良するのが望ましいように思われる (Sasaki & Yamada, 2020, *Front. Res. Metr. Anal.*). 他にもデメリットは存在するため、現状では必要に応じて取り入れるのが良いと考えられる (佐々木, 2023, 認知科学).

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計23件（うち査読付論文 15件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 20件）

1. 著者名 Iseki Sayo, Sasaki Kyoshiro, Kitagami Shinji	4. 巻 10
2. 論文標題 Development of a Japanese version of the Psychological Ownership Scale	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 PeerJ	6. 最初と最後の頁 e13063
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7717/peerj.13063	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Yonemitsu Fumiya, Sasaki Kyoshiro, Gobara Akihiko, Yamada Yuki	4. 巻 14
2. 論文標題 The clone devaluation effect: does duplication of local facial features matter?	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 BMC Research Notes	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s13104-021-05815-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Yonemitsu Fumiya, Sasaki Kyoshiro, Gobara Akihiko, Yamada Yuki	4. 巻 16
2. 論文標題 The clone devaluation effect: A new uncanny phenomenon concerning facial identity	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 e0254396
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0254396	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Yang Jingwen, Wu Xue, Sasaki Kyoshiro, Yamada Yuki	4. 巻 9
2. 論文標題 No significant association of repeated messages with changes in health compliance in the COVID-19 pandemic: a registered report on the extended parallel process model	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 PeerJ	6. 最初と最後の頁 e11559
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7717/peerj.11559	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Sasaki Kyoshiro, Yamada Yuki	4. 巻 -
2. 論文標題 SPARKing: Sampling planning after the results are known	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 PsyArXiv	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.31234/osf.io/ngz8k	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ikeda Ayumi, Yonemitsu Fumiya, Yoshimura Naoto, Sasaki Kyoshiro, Yamada Yuki	4. 巻 -
2. 論文標題 The Open Science Foundation clandestinely abused for malicious activities in unintended manners	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 PsyArXiv	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.31234/osf.io/xtuen	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Mori Yuki, Takashima Kaito, Ueda Kohei, Sasaki Kyoshiro, Yamada Yuki	4. 巻 -
2. 論文標題 Trinity Review: Integrating Registered Reports with research ethics and funding reviews	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 PsyArXiv	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.31234/osf.io/tx5v6	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yonemitsu Fumiya, Sasaki Kyoshiro, Gobara Akihiko, Yamada Yuki	4. 巻 -
2. 論文標題 The clone devaluation effect: A new uncanny phenomenon concerning facial identity	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 PsyArXiv	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.31234/osf.io/x8ugt	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Sasaki, K., & Yamada, Y.	4. 巻 5
2. 論文標題 Boosting Immunity of the Registered Reports System in Psychology to the Pandemic	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Frontiers in Research Metrics and Analytics	6. 最初と最後の頁 607257
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/frma.2020.607257	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yang, J., Wu, X., Sasaki, K., & Yamada, Y.	4. 巻 8
2. 論文標題 Changing health compliance through message repetition based on the extended parallel process model in the COVID-19 pandemic	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 PeerJ	6. 最初と最後の頁 e10318
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7717/peerj.10318	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Sasaki, K., Kobayashi, M., Nakamura, K., & Watanabe, K.	4. 巻 10
2. 論文標題 The evasive truth: Do mere exposures at the subliminal and supraliminal levels drive the illusory truth effect?	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Royal Society Open Science	6. 最初と最後の頁 201791
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1098/rsos.201791	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yonemitsu, F., Ikeda, A., Yoshimura, N., Takashima, K., Mori, Y., Sasaki, K., Qian, K., & Yamada, Y.	4. 巻 7
2. 論文標題 Warning 'Don't spread' versus 'Don't be a spreader' to prevent the COVID-19 pandemic	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Royal Society Open Science	6. 最初と最後の頁 200793
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1098/rsos.200793	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yamada, Y., Xu, H., & Sasaki, K.	4. 巻 9
2. 論文標題 A dataset for the perceived vulnerability to disease scale in Japan before the spread of COVID-19	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 F1000Research	6. 最初と最後の頁 334 ~ 334
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.12688/f1000research.23713.2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Zhu, S., Sasaki, K., Jiang, Y., Qian, K., & Yamada, Y.	4. 巻 8
2. 論文標題 Trypophobia as an urbanized emotion: comparative research in ethnic minority regions of China	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 PeerJ	6. 最初と最後の頁 e8837
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7717/peerj.8837	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Marmolejo-Ramos, F., Murata, A., Sasaki, K., Yamada, Y., Ikeda, A., Hinojosa, J. A., Watanabe, K., Parzuchowski, M., Tirado, C., & Ospina, R.	4. 巻 67
2. 論文標題 Your Face and Moves Seem Happier When I Smile	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Experimental Psychology	6. 最初と最後の頁 14 ~ 22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1027/1618-3169/a000470	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 天野夏葵・佐々木恭志郎・石井辰典・渡邊克巳	4. 巻 119
2. 論文標題 視覚的嫌悪感をもたらす接触忌避反応	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 65-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 徐皓芹・佐々木恭志郎・山田祐樹	4. 巻 119
2. 論文標題 視触覚トライポフォビア	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 19-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yonemitsu, F., Sasaki, K., & Yamada, Y.	4. 巻 -
2. 論文標題 The superiority of up/down over left/right in metaphorical association with emotion	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 基礎心理学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yoshimura Naoto, Yonemitsu Fumiya, Sasaki Kyoshiro, Yamada Yuki	4. 巻 11
2. 論文標題 Robustness of the aging effect of smiling against vertical facial orientation	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 F1000Research	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.12688/f1000research.111126.3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Suzuki Chiharu, Shirai Nobu, Sasaki Kyoshiro, Yamada Yuki, Imura Tomoko	4. 巻 13
2. 論文標題 Preschool children aged 4 to 5?years show discomfort with tryphobic images	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Scientific Reports	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1038/s41598-023-29808-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -



1. 著者名 Sasaki Kyoshiro, Yamada Yuki	4. 巻 17
2. 論文標題 SPARKing: Sample-size planning after the results are known	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Frontiers in Human Neuroscience	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fnhum.2023.912338	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Sasaki Kyoshiro, Watanabe Katsumi, Yamada Yuki	4. 巻 na
2. 論文標題 Sense of object ownership changes with sense of agency	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 PsyArXiv	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.31234/osf.io/8nsp3	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐々木恭志郎	4. 巻 30
2. 論文標題 学部における心理学の再現性にまつわる教育的試み	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 認知科学	6. 最初と最後の頁 161-167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11225/cs.2023.003	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計29件 (うち招待講演 11件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 佐々木恭志郎
2. 発表標題 揺蕩う人間による心理学研究
3. 学会等名 関西若手実験心理学研究会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐々木恭志郎
2. 発表標題 礎から見た応用・実用ー築きましょう！認知心理学と消費者行動の架け橋ー
3. 学会等名 第63回消費者行動研究コンファレンス 統一論題（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐々木恭志郎
2. 発表標題 GoTo オンライン - Web 実験・調査を利用した非接触型ヒト行動データ収集 -
3. 学会等名 日本認知科学会第38回大会 企画シンポジウム「認知科学の研究・実践のDX（デジタルトランスフォーメーション）（招待講演）」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小野史典・山田祐樹・高橋康介・佐々木恭志郎・有賀敦紀
2. 発表標題 逆向性線運動錯視
3. 学会等名 日本認知心理学会第19回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山田祐樹・朱思齊・姜月・佐々木恭志郎・錢こん
2. 発表標題 フィールドとラボが同時に停止する日
3. 学会等名 第9回顔・身体学領域会議
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 立花太希・尾崎翼・橋本芳・佐々木恭志郎
2. 発表標題 笑顔の皮肉 口元のプリントされたマスクがもたらす不気味さ
3. 学会等名 第9回顔・身体学領域会議
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 笠原舞・鈴木千春・佐々木恭志郎・山田祐樹・伊村知子・白井述
2. 発表標題 幼児・児童を対象としたリモート視覚発達実験の有効性 トライポフォビアの発達実験（鈴木ら，2020）の追試を通して
3. 学会等名 日本視覚学会2021年夏季大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田祐樹・朱思齊・姜月・佐々木恭志郎・錢こん
2. 発表標題 生活環境によって規定される身体感情メタファ 瑤和棒棒
3. 学会等名 第8回顔・身体学領域会議 オンライン
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐々木恭志郎
2. 発表標題 学術雑誌にまつわるエトセトラ
3. 学会等名 第11回Society for Tokyo Young Psychologists (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐々木恭志郎
2. 発表標題 身体化された感情 上がれば天国・落ちれば地獄
3. 学会等名 第5回赤ちゃん学コロキウム(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 日高聡太・佐々木恭志郎・川越敏和・浅井暢子・寺本渉
2. 発表標題 身体の所有感と主体感の自然なありさま
3. 学会等名 第1回学術変革領域研究A「生涯学」領域会議(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 米満文哉・池田鮎美・吉村直人・高嶋魁人・森優希・佐々木恭志郎・錢こん;・山田祐樹
2. 発表標題 「拡散者にならないで」は「拡散しないで」よりもコロナの感染拡大防止に効果的なのか?
3. 学会等名 日本認知心理学会第18回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高木あい・佐々木恭志郎・中村航洋・渡邊克巳
2. 発表標題 その食事どこから見るか? 食動画の視点の違いがもたらす空腹感の変容
3. 学会等名 日本認知心理学会第18回大会(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木千春・白井述・佐々木恭志郎・山田祐樹・伊村知子
2. 発表標題 要素の数と重畳が集合体恐怖に及ぼす影響
3. 学会等名 日本視覚学会2021冬季大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 木村太紀・佐々木恭志郎・中村航洋・渡邊克巳
2. 発表標題 親しみやすい角度がもたらす物体好意度の上昇
3. 学会等名 電子情報通信学会HIP研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 米満文哉・佐々木恭志郎・山田祐樹
2. 発表標題 なぜ上下空間と感情の連合は左右よりも強いのか？
3. 学会等名 日本基礎心理学会第39回大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 朱思斉・佐々木恭志郎・姜月・錢こん；・山田祐樹
2. 発表標題 中国辺境の少数民族におけるトライポフォビアへの耐性
3. 学会等名 日本感情心理学会第28回大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kitamura, M., Sasaki, K., Ishii, T., & Watanabe, K.
2. 発表標題 Do we precisely monitor our own advice-taking behaviors?
3. 学会等名 XI. Dubrovnik Conference on Cognitive Science (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 天野夏葵・佐々木恭志郎・石井辰典・渡邊克巳
2. 発表標題 視覚的嫌悪感をもたらす接触忌避反応
3. 学会等名 電子情報通信学会HCS研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中村航洋・佐々木恭志郎・渡邊克巳
2. 発表標題 顔印象の心理学研究から考えるルックス至上主義の世界
3. 学会等名 第3回 犬山認知行動研究会議
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 朱思斉・佐々木恭志郎・姜月・錢コン・山田祐樹
2. 発表標題 雲南省少数民族的空間情動比喻
3. 学会等名 第3回犬山認知行動研究会議
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木千春・白井述・佐々木恭志郎・山田祐樹・伊村知子
2. 発表標題 子どもにもトライフォビアは生起するのか? : 4-9歳児と成人を対象に
3. 学会等名 日本視覚学会2020冬季大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐々木恭志郎・朱思斉・姜月・錢コン・山田祐樹
2. 発表標題 ハニ族とタイ族以外の雲南少数民族における身体的心性
3. 学会等名 第5回顔・身体学領域会議 口頭発表 沖縄県市町村自治会館
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐々木恭志郎・米満文哉・山田祐樹
2. 発表標題 根強い「タテ」の関係性 垂直・水平間の空間感情メタファの顕著性の違い
3. 学会等名 第5回顔・身体学領域会議 口頭発表 沖縄県市町村自治会館
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 徐皓芹・佐々木恭志郎・山田祐樹
2. 発表標題 視触覚トライフォビア
3. 学会等名 電子情報通信学会HIP研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐々木恭志郎・中村航洋・渡邊克巳
2. 発表標題 顔の信頼感/不信感判断のアシンメトリ
3. 学会等名 日本基礎心理学会第38回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐々木恭志郎・山田祐樹
2. 発表標題 自閉傾向により引き裂かれる上下空間と感情
3. 学会等名 第4回顔・身体学領域会議 ポスター発表
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 錢コン・佐々木恭志郎・朱思齊・姜月・山田祐樹
2. 発表標題 雲南少数民族でも上は良し
3. 学会等名 第4回顔・身体学領域会議
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐々木恭志郎・渡邊克巳・山田祐樹
2. 発表標題 見えない, でも不快 円形集合体への無意識的感情処理
3. 学会等名 認知心理学会第17回大会
4. 発表年 2019年



## 〔図書〕 計2件

1. 著者名 佐々木恭志郎・山田祐樹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 464
3. 書名 顔身体学ハンドブック	

1. 著者名 三浦佳世・河原純一郎	4. 発行年 2019年
2. 出版社 美しさと魅力の心理	5. 総ページ数 216
3. 書名 ミネルヴァ書房	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

個人ページ <a href="https://kyoshiro0920.wixsite.com/japanese">https://kyoshiro0920.wixsite.com/japanese</a> 研究代表者のwebページ <a href="https://kyoshiro0920.wixsite.com/japanese">https://kyoshiro0920.wixsite.com/japanese</a>
---

## 6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------